

姉上とは大島
維長廣瀬勝比
古夫人をさす
その女子を譽
といふ

一五 廣瀬中佐の手紙
毎度の御懇書拜受再三精讀罷在候先以て姉
上様にも馨ちやんにも不相變の御壯健大賀
の外無之候從て武夫儀は例の頑健日夜軍務

に従事罷在候間乍憚御休神可被下候毎々の
御手紙は實に武夫に對する御友愛の情溢る
る許りにて武夫は衷心感激の至に堪へず乍
毎度唯々感謝罷在候御惠贈の書籍吳羊羹耳
袋並に靴足袋確に拜受致候御厚情に酬いん
辭を見出し申さず難有奉謝候
先日大島艦入港し即夜家兄來訪被下戰後始
めて兄弟の面會不覺嬉涙に暮れ申候兄上様
は昨今御身體壯健に被爲渡吳にて見申せし
如き病後の様子更に無之在艦の同僚等も皆
左様見受候程なれば御安心可然と存じ候報

報國丸は明治
三十七年二月

二十三日旅順
閉塞の時旅順
中佐の指揮せ
し船
先考は廣瀬重
武

國丸にての働に付兄上様には非常に被悦武
勇絶倫先考並に山縣先師に代り之を激賞す
との御手紙をも戴き武夫の満足不過之候翌
朝大島は錨を抜きて出港致候處昨夜御手紙
参り候不相變御壯健の趣御休神可被下候
知己諸君よりの祝詞多く新聞紙上にも有る
こと無きこと書立て鬼などとの綽名をも付
し申候など可笑くもあり迷惑致候事も有之
候而して報國丸にて働きし真相など武夫よ
り親しく聞きしなどと書立て候も誤多く迷
惑に感じ候點も有之候

報國丸に乗組
みて閉塞に赴
きし時の負傷
者

七たび人間に
生れて國賊を
滅さんとは楠
公臨終の語

負傷者に御見舞として餅との仰はさる事な
がら彼等には焼くなどの自由無之候間御止
被下度若思召有之候はゞ武夫の姉として見
舞状を御出し被下候はゞ幸甚の至に候
武夫儀は愈軍功相勵み申すべく七生人間滅
國賊とは一貫の精神に有之候間決して先夜
位の働にて満足致す者に無之候元來天祐を
確信し居る事に候へば決して無用の御配慮
被下間敷候 再拜

三月二十日

弟 武 夫

姉 上 様 御許へ